

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 26 日現在

機関番号：43923

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520557

研究課題名(和文)前置詞句を含む表現の歴史的発達に関する構文文法的研究

研究課題名(英文)A Construction Grammar Approach to the Historical Development of Expressions with Prepositional Phrases

研究代表者

石崎 保明 (ISHIZAKI, Yasuaki)

南山大学短期大学部・英語科・准教授

研究者番号：30367859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、歴史言語学におけることばの変化を扱う諸理論に対する実証的・理論的な貢献を図ることを目的として、前置詞句をその構成要素に含むいくつかの構文の歴史的発達過程の実態を調査し、それらの歴史的発達過程を、認知言語学において広く採用されているものことばの通時的発達の説明にこれまで応用されることの少なかった構文文法理論の観点から説明を試みた。研究期間中においては、本研究に関連する成果を、国際学会1件を含む4件の研究発表と1冊の図書(共著)、および3編の学術論文、として公表した。

研究成果の概要(英文)：In the present research, I aimed at exploring construction grammar perspectives on the historical development of grammatical constructions with prepositional phrases. Examining the developments of prepositional phrases in the history of English, I presented cognitive historical analyses of the way-construction and the conative construction. Fruits of work in line with this research within the research duration include 4 oral presentations at international, national and linguistic societies, one collectively written book, and 4 articles.

研究分野：英語学、英語史

キーワード：英語史 認知言語学 用法基盤モデル 構文文法 前置詞句

### 1. 研究開始当初の背景

現在、構文文法理論(Construction Grammar、以下、CG とよぶ)は言語理論における大きな潮流となっており、その枠組みで議論される言語表現(以下、構文(construction)とよぶ)の中には、例えば way 構文(例: *John elbowed his way through the crowd.*)や動能構文(例: *John shot at the target.*)のように、前置詞句をその構成要素に含むものが多くある。しかしながら、これまでの構文研究は、もっぱら現代の話者が日常的に用いている言語現象に焦点が置かれているというのが現状である。この理由は、ひとつには、CG が構文の通時的発達ではなく、子どもの言語習得プロセスの解明に軸足を置いていることによるものと考えられる。

構文の通時的発達に対する CG に基づく研究は、2000 年代前半頃まではその適用可能性についての指摘が一部であったものの、その理念に忠実な形で押し進められているとは言いがたい状況であった。一例を挙げると、way 構文に生起する動詞の種類の通時的な拡張を扱った代表的な研究に Israel (1996) があるが、そこでの議論のために用いられているデータは、もっぱら使用文脈が捨象された単文の集成である Oxford English Dictionary(以下、OED とよぶ)に依拠するものである。OED は世界最大の収録語彙数を誇る権威のある辞書であり、言語資料としてそれを用いること自体は妥当な研究手法であるものの、OED にのみ依拠する Israel の研究には、(1)どのような文脈の中でその構文が使用され発達してきたのか、(2)構文を構成する動詞句と前置詞句の共起関係がどのようなものであったのか、といった視点が考慮されていないという問題がある。これらの指摘は、構文が使用(文脈)との関係で発達するという CG の基本的想定(これを用法基盤モデル(Usage-Based Model、以下、UBM とよぶ)を鑑みると、本質的な問題点であるといえる。

### 2. 研究の目的

近年、日本においても、いわゆる文法化(grammaticalization、名詞や動詞などのような具体的な意味内容をもつ表現が冠詞や前置詞のような抽象的な「要素間の関係」を表す要素へ変化すること)に代表される言語の通時的変化のメカニズムを CG の観点から捉え直す動きが活発に見られるようになってきている。このような取り組みが見られるものの、大規模な歴史的言語資料を電子化してデータベースとして保存している言語資料(以下、コーパスとよぶ)を用いての研究や、文献学的な知見に基づく CG 研究は、日本においても世界においても決して多いとはいえず、今後さらなる発展の余地が残されている。

以上の学術的背景を念頭に、本研究では、コーパスを用いて、前置詞句を含む構文の発達過程を、他の関連構文の発達を考慮しなが

ら記述・整理し、それらの構文化へ至るプロセスを CG の枠組みを用いた新たな言語変化モデルを用いて説明することを目的としている。

### 3. 研究の方法

本研究は、前置詞を含む構文の具体的事例として、way 構文、動能構文を中心的に取り上げて研究を進めた。この研究の方法としては、(1)その構成要素に前置詞を含む構文の通時的発達に対する実証研究と、(2)UBM を基盤とした CG に基づく説明、に大別される。

#### (1) 通時的発達に対する実証的研究

実証的研究に際しては、以下の3点に注意を払いながら、用例を採取した。

当該の構文の文脈内での特に語用論的な背景

構成要素間の共起関係

テキストの種類を念頭に入れながらの(トークン・タイプ)頻度の分布および変化

上記 および を考慮に入れた試みについては、報告書のこれまでの way 構文の研究の中でも触れられているが、の観点については含んでおらず、データの質と量の両面において、まだ十分なものとはいえなかった。このような実証研究を行う上での不備を補うため、本研究では、コーパスと古い時代出版された英語辞書や文法書を歴史的言語資料として、各々の構文について順次調査を進めていった。その際、本研究の焦点が現代英語(おおむね 1900 年以降の英語)で日常的に使用されている構文が発達していくプロセスに置かれていることから、古英語期(おおむね 1100 年頃までの英語)からの通時的視点は維持しつつ、近代英語期(おおむね 1500 年から 1900 年頃までの英語)以降の発達を中心に調査を進めた。

#### (2) 構文文法理論(CG)に基づく説明

理論的説明については、報告者の最近の研究などから、特に Brinton and Traugott (2005) (以下、B&T とよぶ)による語彙化(lexicalization、より具体的な(さらには特殊な)意味内容をもつ表現に変化すること)、文法化、およびイディオム化といった現象が UBM において説明可能であることが明らかになりつつあった。例えば、イディオム化を通時的変化と捉えた場合、例えば *be going to* のように、主として文法化を経ていると考えられるものから、*lose sight of* のように語彙化を経ているものがある。一般に構文はこのいずれかの発達に分類できるものが多いが、報告者が句動詞について最近発表した研究で明らかになったように、同じタイプの構文でも個別の事例においてはそのイディオム化の性質が異なる場合も考えられるため、過度の一般化とならないように、慎重に理論化を図った。

#### 4. 研究成果

本研究では、(1) 言語事実に対する実証的研究と(2) 理論的貢献、の両面において、以下のような研究成果があったと考えている。

##### (1) 言語事実に対する実証的研究

本研究期間においては、具体的な言語事実の実証研究として、以下の3種類の考察を行った。

英語史における前置詞句の通時的発達  
way 構文の実証的・理論的考察  
動能構文の実証的・理論的考察

上記において、古英語期には、一般に、前置詞の目的語として、*at* のように与格名詞のみを取るもの、*through* のように対格名詞のみをとるもの、そして *over* や *on* のように与格名詞と対格名詞の両方を取るものがある(前置詞はすべて現代語訳)。これまでは個々の前置詞が何格の名詞を取るかは意味ではなく、形式上決まっているという考え方が一般的であったが、本研究では、現代ドイツ語の格の選択が意味的(あるいは認知的)に決まるという Smith (1987, 1993) や Langacker (1999) の研究が古英語にも適用可能であることを実例とともに示した。英語では、現代ドイツ語とは異なり、初期近代英語期までには与格と対格の形態上の違いが消失したものの、例えば *in* と *into*、*on* と *onto* のペアのように、到達後の位置を明示する *to* が同時期以降、頻繁に用いられるようになり、与格と対格の選択による意味的な違いは古英語期とは別の形式で表現されるようになったことを示した。この内容は、第32回日本英語学会大会シンポジウムで発表した。

において、時代や地域、ジャンルなどに区切られた様々なコーパスを用いて、way 構文の初期における発達から現代英語に至るまでの発達を調査した。まず、way 構文の初期の発達については、OED は 1400 年の *Mandeville* の例が引用されているものの、その用例や当時のその用例以外の使用状況についての調査はこれまではなかった。そこで、初出とされる用例をよく観察してみると、現代英語とは異なる語順で用いられており、さらに、1473 年から 1701 年までの 12 万 5 点以上の資料を集めたデータベースである Early English Books Online (以下、EEBO とよぶ)を用いて way 構文の初期の発達を調べてみると、1400 年代には *Mandeville* の 2 つの写本の例のみしかなく、way 構文が表れ始めたのは、せいぜい 1600 年代頃からであることを実証した。

EEBO を用いた調査によると、way 構文の初期においては、前置詞句については *through* と (*in-, on-*)*to* のいずれかがほぼ同頻度で選ばれており、動詞についてはまずは *make* が、その後 *make* とともに *force* の使用が増えてくるという通時的実情が観察された。前置詞 *through* と (*in-, on-*)*to* はともに

「移動と到達」を含意する前置詞であること、および動詞 *make* と *force* がともに(力の行使による)道の創造を意味することから、way 構文の初期における構文的意味は、「動作主体が道の創造(その後は「力の行使」へと拡張)により、ある場所を通過または到着すること」であると結論付けた。

その後の way 構文の発達については、様々なコーパスを用いて用例を採取し、動詞の種類については徐々にではあるが非常に多くのものと、前置詞の種類についてはわずかに、拡張を見せることが分かった。よって、way 構文は、英語史を通じて以下の構文的意味(ここではスキ-マとよぶ)が<1>(もっとも具象的)から<4>(もっとも抽象的)の順に拡張していったと結論付けた。

##### <Way 構文におけるスキーマの拡張>

- ・[スキーマ<1>]  
道の創造による何らかの障害物の除去またはそれを回避する移動
- ・[スキーマ<2>]  
力の行使による何らかの障害物の除去またはそれを回避する移動
- ・[スキーマ<3>]  
何らかの障害物の除去またはそれを回避する移動
- ・[スキーマ<4>]  
特異な様式での移動

このスキーマ<1>から<3>までの拡張プロセスについては、障害物の除去またはそれを回避する移動手段の多様化のプロセスと考えることができる。他方、スキ-マ<4>については、何らかの障害物の存在を想起することが困難な例があるものの、そのような用例は現代英語においてもごく少数であり、例えば *smile one's way into one's favour* といった用例のように、文のレベルでは動詞や前置詞句から何ら障害物の存在を想起しにくいような用例であっても、文脈をたどって調べてみるとその移動が何らかの困難を伴うといった場合が多いことから、スキ-マ<4>はすべての英語母語話者の脳内に定着した用法ではないと考えられる。

way 構文における以上の成果は、国際学会(第5回後期近代英語に関する国際会議)や第32回日本英語学会シンポジウムを含む4件の学会で発表するとともに、2編の論文として発表している。

において、動能構文は、目的語を伴う他動詞構文と目的語を伴わない自動詞構文の交替現象の事例として議論が始まり、その後は様々な理論的枠組みで議論されてきた。本研究では、古英語期や中英語期(おおむね1100年から1500年までの英語)においては現代英語期に出版された文法書を中心に、近代英語期については EEBO や当時出版された英語辞書や英文法書、それぞれを調査し *at* がどのように記述されていたのかを調査し

た。その結果、前置詞 *at* は、作品により *on* や *in* と競合しつつも、一貫して「場所」を表していたものが、その場所の内部なのか外部なのかについては意識されずに使われてきたと考えられ、その構文的意味が、動能構文がもつ「意図的な行為を描写するがその行為が実際に達成されたかどうかは不明」といった意味へと引き継がれているものと考えられる。つまり、動能構文が持つ「行為の達成を背景化させる」意味は、動能構文に特有のものではなく、前置詞 *at* が古くから持っている意味である可能性を示唆した。つまり、動能構文は、個々の構成要素からは意味の予測が不可能な程度の構文的意味を持っているわけではなく、生産性が高いわけでもないため、動能構文を通時的発達の観点から捉えると、文法化や語彙化とは無関係の発達であるということになると結論付けた。

動能構文における以上の成果は、第 32 回日本英語学会シンポジウムで発表している。

## (2) 理論的貢献

本研究は、言語事実の発掘とともに、CG の理論的進展をその目的としている。具体的には、前置詞句をその構成要素に含むいくつかの構文の歴史的発達過程を、CG において広く採用されているものことばの通時的発達の説明にこれまで応用されることの少なかった CG の観点から説明を試みた。

CG には、現在のところ、その理念の多くを共有しつつも言語観の違い等からいくつかの流派が存在する。また、CG に基づく言語変化の歴史研究はまだ始まったばかりであり、今後は研究手法においてもさらなる精緻化が求められる。本研究期間中に明らかになったものとして、構文化の方向性を挙げることができる。報告者のこれまでの研究から、構文化には、通常の語結合による構文化に加えて、そこから文法化の進行とともに発達する構文化と、語彙化の進行とともに発達する構文化、の少なくとも 2 つの方向性があることを提案している。本研究では、動能構文が のどちらにも該当しない可能性を示唆した。

本研究期間中では、個々の言語表現の歴史的発達が、上記の理論的枠組みにおいて、どのように分析されるのかを考察した。その結果、例えば現代英語の句動詞 *set out* は‘to start’の意味をもち、個々の構成要素からは意味の予測が困難であることから、一見したところ、 のタイプの変化であると分析できそうである。しかしながら、コーパスを用いた調査や *out* と *forth* の分布上の競合から、*set out* はもともと *set* それ自体で‘to start’の意味を表しており、その後方向を表す *forth* と共起し、さらには *forth* が *out* に置き換わったことによりできた表現であり、その置換には、*out* が完了の意味（つまり文法的意味）を獲得するプロセスの中で生じたことから、「文法化とともに発達した構文化」の事例と

いうことになる。

Way 構文は、上述のスキ - マの拡張プロセスから明らかなように、通時的に動詞と前置詞のタイプ頻度を上げ、生産性を高めていったことから、おおむね「文法化の進行とともに発達した構文化」の事例であるといえる。しかしながら、同じ way 構文であっても、現代英語の *wend one's way* という表現は、トークン頻度が極めて低く、動詞 *wend* が単独で用いられることもないことから、この用例に関しては、*wend one's way* という表現形式で化石化 (fossilization) したという意味で、「語彙化の進行とともに発達した構文化」の事例であると分析した。

動能構文については、前置詞 *at* が英語史を通じて極めて高い頻度で用いられており、意味や形式の変化も見られないことから、文法化や語彙化とは無関係であるといえる。

最後に、本研究は、以下の点で、CG だけでなく、隣接する他の研究領域に対してもいくつかの帰結を与えるものであると考えている。まず、本研究では、コーパスを用いてその文脈をたどりながらデータを採取したが、これにより、より詳細な発達過程が明らかになり、その成果は歴史語用論の分野にも還元されるものと考えられる。

また、古英語期の格の分布を CG の観点から考察した研究はこれまではほとんどなく、この成果は、当該の研究のみならず、英語史の特に古英語期の格標示理論の研究にも還元される。

さらに、現在はしばしば独立した現象として研究が進められている文法化・語彙化・イデオム化を扱う理論が、UBM を基盤とした CG において統一的に説明可能であることを示すことは、今後の歴史言語学と認知言語学の両方の発展に大きく寄与するものと考えている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

石崎保明, 「近・現代アメリカ英語における way 構文の発達について」, 『アカデミア』文学・語学編 98 号(印刷中)(査読無)

Ishizaki, Yasuaki, "On the Initial Development of the *One's Way* Construction: A Constructional Grammatical Perspective," *IVY* 46, 2013, 49-73. (査読有)

石崎保明, 「構文文法理論における文法化の扱いについて」, 『第 64 回日本英文学会中部 支部大会プロシーディングス』, 2013, 171-172 (査読無)

[学会発表](計4件)

石崎保明, 「認知言語学の視点からの通時的言語変化」, 日本英語学会第 32 回大会シンポジウム(シンポジウム題目:「言語変化に対する多角的アプローチ」), 2014

年 11 月 9 日, 学習院大学(東京都豊島区)  
Ishizaki, Yasuaki (石崎保明), 'A  
Historical Constructional Approach to  
the Way-Construction,' 5th  
International Conference on Late  
Modern English(第 5 回後期近代英語に  
おける国際会議), 2013 年 8 月 31 日, The  
University of Bergamo (ベルガモ大学)  
(ベルガモ(イタリア))  
石崎保明, 「構文文法理論における文法化  
の扱いについて」, 日本英文学会中部支  
部第 64 回大会, 2012 年 10 月 27 日, 南山  
大学(愛知県名古屋市)  
石崎保明, 「英語表現の歴史的発達に対す  
る構文文法的研究」, 南山大学学会研究集  
会, 2012 年 7 月 4 日, 南山大学(愛知県  
名古屋市)

〔図書〕(計 1 件)

石崎保明他, 開拓社, 『言語変化—動機と  
メカニズム』, 2013 年, 319 (222-237)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

石崎 保明 (ISHIZAKI, Yasuaki)

南山大学短期大学部・准教授

研究者番号: 30367859